

秋田県衛生研究所報

第 7 輯

昭和 37 年度

REPORT
OF THE
AKITA INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH
(7)

No. 7

1963

秋田県衛生研究所

秋田市土手長町 1

1 DOTENAGA-MACHI, AKITA CITY,

AKITA PREF., JAPAN.

巻 頭 の 言 葉

所 長 児 玉 栄 一 郎

このところ科学が大いに進歩発達したのであるが、医学の領域においても同様である。昔の医学が進歩発展して今日に及び、今後それが何処まで進展して行くものか到底測り知れないものがある。従つて長生きすればする程新しい医学の恩恵に浴すということになる。しかし医学は医人独自の力でのみ発展して行くものではなく、科学の恐らくあらゆる分野の進歩と多かれ少なかれ関連があり、恐らく利点を採り込むものが多いかと思われる。

今ここに翻つて現代の医学を見ると、少くとも臨床医学面には抗生物質があり、ステロイドホルモンがあり、アイントープがあり、一見何の不足もないように見えるが、しかし一方病原体が不明だつたり、機序が明らかでなかつたり、治療の的確でなかつたりするものが沢山ある。もちろん疾病の治療には対症療法というものがあり、一時の苦痛の軽減に役立つのであるが、しかしこれはあくまで応急処置であつて、満足できるものではない。病気によつては病因不明なるまゝ経過して了うものもある。例えば「かぜ」である。傷寒論に遡る訳ではないが、感冒を寒冒と書く医師がある程「かぜ」の周囲は漠然としている。感冒様疾患の何処に位置させるべきか種々検査を行つている間に「かぜ」は何処かへ去つてしまう。対症療法が効を奏したかどうか、それとも自然治癒を遂げたのかどうかかわからない。疾病が治つたのであり、苦痛は去つたのであるからそれで良い訳であるが、割り切れないのは医師であろう。こゝに希望を言わしめるならば、病初に的確な診断を下し、的確な治療を行いたいことである。いやもう一言いうならば予防の完全ということである。

ひるがえつて考えてみると「医」の道は厳しいということである。医師は病気を治しさえすればそれで済む訳ではない。病気のみならず人を治さなければならない。疾病を治すために人の生命を奪つてはならないのである。時には人を治し、国を治さなければならないこともあろう。これは少し言い過ぎかも知れないが、診断治療の正鴻を期し、人を病苦から解放しようとするれば並み大抵の心掛けではできないことである。況して予防を期待する場合である。更に表面に現われずして心身を勞するものは原因機構解明を目標とした研究者であろう。研究という場合には自身の仕事以外に世の理解が必要だからである。

この頃成人病対策という言葉は津々浦々にまで聞える。成人病ということは老人病というように、一つの病名ではない。いわば便宜の上の病名であり、農業に従事する人々に起る病気を農夫症というが如しである。それは兎も角成人病の一つの本態性高血圧症という病気、しかしこれも将来病名が変えられるかも知れないが、本態性高血圧症の本態が不明であるが故に是非ともとり上げてほしい問題である。そして本症についての研究はいわば一次的対策である。調査と言ひ、研究と言ひ、これなしには解決は覚束ない。

しかし幸いなことに調査などは大方世に認められる次第になつたのであるが、願わくはこの熱意が炎となつて末長く燃えつづけて欲しいことである。ただ此処に一言したいことは高血圧症を例にとると、その調査だけでは疑点解明とならないということである。

次に一言研究者の心構えということに触れて見たい。これはむしろ私自身に言いきかすことであるかも知れないし、忸怩たるものがある次第であるが、研究をめざす人々は胸に熱意の炎を絶やさぬことであらうと思う。ウイラントというドイツの学者はシロタマゴテングダケの毒素を親子三代で漸く解明した。成功の蔭には現代科学の発展と方法の進歩、すなわちクロマトグラフがあつた故もあつたが、これは熱意がなければできない仕事である。しかしウイラントでも日本で研究したとしたら成功は更に困難であつたらうと思う。何となれば日本では経済的同情が甚だ薄いからである。

窪田空穂という歌人に次のような一首がある。

損得を知らざりし日の初一念

宿命の道を歩むに老いぬ

窪田空穂氏はもちろん科学者ではない。

しかし彼は古今集、新古今集、その他の研究で有名であるばかりでなく、またすぐれた歌人である。私は寂しいとき何時もこの一首を口づさむのである。弁明も理屈もない、一念に生きる人は恐らく誰しもこの寂しさを心にもつものである。しかし事細やかに損得を計算したら研究する人々はもつと惨めな気持ちにならう。

終りに一言い添えたいことは研究者はまた人格者であるということである。これを人に望み、自分に望むことは少し無理かと思うが、人を欺くものは己を欺くであらうし、周囲を信用できず、遂には自己喪失になり兼ねないからである。また研究自体が完全であつてもその周囲に世の中があるということを念頭に置くべきである。しかしこのことについては他の機会に譲ることとし、ひと先ずここで終りたいと思う。